
寂しいと兎は死ぬ

エクス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

寂しいと兎は死ぬ

【Nコード】

N7134Z

【作者名】

エクス

【あらすじ】

感情も家族もない天涯孤独な主人公、獅子ヶ原守が兎を拾い徐々に感情を手にいれていく話。

オタネタが結構多いかもしれません（笑）

プロローグ（前書き）

読んでくださると嬉しいです

プロローグ

孤独ってなんだろう？

ボッチでいることが孤独なのだろうか？

寂しいって感じたら孤独なのだろうか？

そんな俺の物語

≡ § ≡ § ≡ § ≡ § ≡ §

小学校卒業の前日の事だった

事故で俺、獅子ヶ原^{しがわらまもる}守は父を失った

事故なんてしょっちゅう起こってることだ

それが身内で起こったただけだ

悲しみなどはなかった

……今思えばやっぱりこの頃の俺は冷めてたんだな。

母は俺を産むと同時に死んでいる

親戚はいない

本当に呪われてんじやないかと思えるな

俺は天涯孤独の身となった

施設に入るかと言う話がきたが断った

俺は寂しさというものをもっていなかった

いや、寂しさだけじゃない、感情そのものがなかったんだ

とある《・・・》わけで金は座っていてもどんどん入ってくるから金に困ることはなかった

感情のないまま本能に従って中学二年間を過ごした

朝遅刻するのは当たり前、授業もサボりの常習犯、だけど成績だけは常に学年トップだったから先生に怒られることはなかった

そんな事に不満をもって絡んでくる奴も少くはなかった

俺はそんな奴の相手をしているうちに孤独な不良の地位を手に入れたけどどうでもよかった

あの頃の俺は何も考えてなかった

あのウサギが転校してくるまでは、な

第1羽

神様は何を考えているんだろうな

≡ § ≡ § ≡ § ≡ § ≡ §

中学三年の二学期の始業式の日、俺は珍しく式に間に合ってしまい、校長のありがたい(?)長文を聞いていた

「夏休みはどうでしたかね。1、2年生は部活や恋愛3年生は受験勉強に忙しかったと思います(以下略)」

しかし俺のまわりは

『なんで獅子ヶ原が来てるんだ』

『しっ、よせ聞こえるって』

『それにしてもホントに珍しいね』

『触らぬ神に祟りなしだぞ』

と俺が来たことに驚いてることが多かったのだ
全部聞こえてるのにバカなのだろうか

とそんなどうでもいいことを考えている内に式は終わり教室に戻る
ことになった

教室に戻ってから夏休みにサーフィンにでも行ってきたのかと言えるほど黒く焼けておりムツキリとした担任教師、えーと名前は……
とりあえず皆から筋肉先生と呼ばれている先生だ
その筋肉先生が

「みんな、きいて驚け!!なんと転校生だ。」
とドヤ顔で言い放った

ざわざわと教室に広がった

「せんせー、おと「女だ」」

誰かが定番とも言える台詞をいったが言い終える前に筋肉が先手をうった

「かわ「よし、入ってこい!!」」

この教師は人の話を聞かない

ガラッ

教室の扉が勢いよくあけられた

そして身長は150センチ弱、髪は黒で兎の髪飾りをつけて、目がぱっちりとしてる一般的に可愛いと呼ばれる部類の女の子がはいってきた

……眼帯をしてだ

「じゃあ、自己紹介をしてくれ」

筋肉が言いきると同時に少女も口をひらいた
だが普通の自己紹介とは言い難い自己紹介でだ

「我が真名はデーモンオブラビット、あの世から参った。こちらの

世界での仮の名は唯野兎、呼ぶときはどちらでもかまわないよ。」
そして名前を名乗り終えた少女は

「刮目せよ」

と眼帯をとり金色の目をみせた
恐らくカラコンだろう

「我が眼はラビットアイ、この眼にみせられたものはもうこの世には帰ってこれぬだろう。クックック」

……これが邪気眼厨二病ってやつか
かわりたくないな

ちょっと周りを見渡すと、他の人もそんな顔をしていた
いや、どっちかって言う俺と関わりたくないってか

「まあ、よくわからんが好きなところ座ってくれ」
筋肉は対処の仕方がわからないらしくスルーしていた

と、そんな時に俺と転校生の目があった

「!!」

そして転校生はわざわざ俺の所までよってきた

「クックック、おにいちや……お主、我が眼にみせられたな」

何ってんだこいつは

『おにいちや?』

周りは俺とは違う部分に興味をもったようだ
俺はどうでもよかったが

「は?」

ちよっとドスの効いた声で反応をすると

「うう、お、お主、我が眼にみせられたな」

……なんでやりなおした?

それにちよっと涙目になってしまった

「……先生、席がわからないそうです」

俺はめんどくさかったから筋肉になげた

「ちよ、なんで、無視するう?」

やっべ、目の前の少女が泣きそうだ

くっそ面倒だな

ええーと、この前カツアゲされてる奴を助けてやったときにそいつ
が言ってたこと言ってみるか

「ごめんなさい、こんなときどんな顔をしていいのかわからないわ」

『綾波!?!』

おお、反応多いな

そんなに有名な台詞だったのか

俺はせっかく助けてやったのにこんな事しか言わなかった奴をとりあえずぶん殴って放置した

「……笑えばいいと思うよ」

『対応してきた!?!』

????俺にはよくわからなかったがこうゆうもんなのか?

「で、なんの用事だクソガキ」

もう、本当にめんどくさかったから少し脅しぎみに聞いた

「うう、そなたは我が眼にみせられたから我が下僕になることを許そう」

「ああ!?!」

「ふ、ふえ、ふえーん」

ついに泣き始めてしまった周りの俺を見る目がうざいな

「てめえら何みてんだゴルァ、てかさっさとテメエも泣き止め!?!」

「グスツ、下僕になってくれるん?」

「ああ!?!」

「うえーん、おにいちゃんが怒ったあ」

本格的に泣き始めやがったそれにおにいちゃん?

「だれがおにいちやんだ！？俺はお前の兄じゃねえぞ」

自分が何言ったか気付いたらしく

「別におにいちやんなって言ってないもん」

と赤くなって訂正してきた

そして少し落ち着くのを待ってから

「で下僕になってくれるん？」

と再び尋ねてきた

「だれがなるかよそんなもん」

「うう」

でまた少し間を開けてから「なら、友達ならなってくれるん？」
と顔を真っ赤にしながら尋ねてきた

その質問に俺はニッコリと笑い

「イ・ヤ・だ」

と告げてやった

少女はびっくりしながら

「なんでだめなん？」

ときいてきた

「俺は他人とつるむきはねえ」

と思ったままの事をいってやった

「……孤独をかつこいと思ってる厨二病なん？」

イラッ

「そりゃ、テメーのことだろうが！！金輪際俺には近づくな！！」
少女は悲しげな顔をしながらあいてる席に向かった

『気にすることないよ』

『私達が友達になってあげるからさ』

『あんなやつ、二度と関わっちゃいけないよ』
とまわりの人に慰められている

俺はさっさと退場することにした

「先生、帰ります」

「おお、そうか。気を付けろよ」

『お前本当に教師か！？』

緩い先生で本当に楽だ

俺はそのまま帰るのも暇でゲーセンによってから帰った

第2羽

次の日

俺はなんでこりずに遅刻しないで行ったんだろう

「おはよう」

教室に入ってから珍しく俺に挨拶をしてくるバカがいた
どこから声がしたかと搜したら、声の主は俺の席に座っていた

そう、あの唯野とかいった少女だ

「クックック、やっときたか我が下僕よ」

こりねえ、奴だな

「邪魔だ、どけ」

「なんでそんな敵対心むきだしなん？」

「別に敵対心はだしてねえぞ。邪魔なもんに邪魔だといったただけだ」

「うう」

唯野は悲しげな顔をしながら自分の席に戻っていった

≡§≡§≡§≡§≡§

それから唯野は休み時間のたびに俺の席に寄ってきて話しかけてきた

最初はうるさいと追い払ったが次から無視したのがいけなかったか
一方的に話しかけてくるようになってしまった

なんでこんなになつかれたかな？

「クックック、我が下僕よ、我に供物をささげよ」

「ああ!？」

なんでたろう、この言葉ばっか使ってる気がする

「うう、ご飯忘れちゃった」

なんだそういうことか

「ホラよ、食え」

俺はもってきた手作り弁当をやった

「え!？」

さっきまでと違う態度に戸惑ってるようだ

「……ツンデレ？」

「ちげーよ!？何でお前はたった一つの親切で人をツンデレにする
んだよ!？いいからありがたく食え。そして俺にこれ以降近づくな」

「お弁当ありがとう。でも近づくなってのはやだ」

ほんと、こいつは俺の何がいいんだろうな？

「守、自分の分は？」

いきなり下の名前で呼んできやがった
ほんと、なんなんだよ……

「ねえにきまってんじゃねえか」

「え？」

びっくりしたように俺と弁当を見比べる
それから何を思ったか

「あーん」

とタコさんウィンナーをさしだしてきた

『!?!?』

どうやら驚いたのは俺だけじゃなかったらしい

「あーんってば」

「ああ、いらねーよ」

俺は断ったが

「あーんってば!!」

なぜか押されてしまって迷ったあげく
グウ

と俺の腹の虫がなってしまった

「はい、あーん」

「くそっ」

俺はしぶしぶたべた

『キャー』

周りからはなんともいえない声があがった

「おいしい？」

バカなのかこいつは

「俺が作ったんだからうまいに決まってんじゃねーか。お前の手柄じゃねーよ」

「そうだったね」

テレッとしながら

「お主の供物、満足じゃ。明日からも我に捧げるがよい」

「はぁ！？俺に毎日作れってことか！？」

「……うん。前の学校給食だったし弁当の作り方わからないもん」

だからって普通他人に頼むか？

「ちっ、しょうがねーな」俺はお人好しなのか

『ツンデレ』

ブチッ

「だれだいま俺を変な名称で呼んだバカは！？表にでやがれ」

でるわけもなく昼休み終了のチャイムがなった

で、結局今日は最後のホームルームまでやって帰った

この時俺に感情が出始めた事に俺はまだ気付いていなかった

第3羽

「我が下僕よ、主の俗世における魔道具の契約番号を我に教えるがよい」

登校一番にそんなことを叫ばれた
……魔道具ってなんだよ
よし、帰ろう

「人違いです」
回れ右をして俺は帰り始める

「ちょー!!なんで無視するん!?!」
後ろから自称魔眼持ち（笑）が追ってきた
よし、前に絡まれてたところを助けてやった奴（二回目）がのたま
ってた事をいうか

「逃げちゃダメだ」
『いう場面ちがう!?!』
ホント、律儀なやつらだな
「……あなたは死な（以下ry」
『悩んだ結果それ!?!』

次は財布を落として困ってた奴（絡まれてた奴）がいった事だ
「ただの人間には興味ありません」
『今度はハルヒネタ!?!』

「私は……じゃなかった我はただの人間ではないぞ」『そうですね』

「でもお前は唯野じゃねーか」

『そうですね!!』

もう面倒だし話を進めるか

「で結局なんの「ホームルーム始めるぞ」……………」

筋肉が空気を読まずに話を中断させた

しょうがなく俺は教室に入っておとなしくホームルームをうけた

≡§≡§≡§≡§≡§

「我が下僕よ、主の俗世における魔道具の契約番号を我に教えるがよい」

筋肉が出ていった途端唯野はやり直してきやがった

「……魔道具ってなんだよ」

「この事だよ」

そういつて懷からケータイを取り出した
めんどくさい奴だな

「ほらよ」

「!!」

素直に出した俺に驚いているようだ

「ツンデレ？」

「だからちげーよ!?!なぜいきなりツンデレになる!?!」

「えっと、赤外線のやり方はと、」

「話を聞けよ!!」

唯野はうーんとうなってからやっと見つけた赤外線のやり方に喜んでいる

「できたよおにいちや……我が下僕よ」

「俺はお前のお兄ちゃんじゃねーぞ。てゆーか間違えるなよ」

俺がお兄ちゃんと口にした途端唯野の顔が暗くなった。あまり触れていい話じゃないようだな

「まあいいや、それとほらよ。今日の弁当だ」

「!!」

「昨日自分が言ったんじゃねーか。弁当作ってこいと」

心底嬉しそうな顔をして

「ツンデ「それ以上いったら没収だぞ」……ありがとう」

余談だがその日から俺の異名は『孤独な不良』から『ツンデレマニアック』に変わった

第4羽

ケータイ番号、メアドを教えるんじゃないかなかったと後悔しはじめた今日この頃

最近の俺の1日は唯野からのおはようメールから始まる
そして唯野から何が食べたいとかいうリクエストをいわれめんどくさいと返信をうちながらも律儀に作ってやってる

たまに学校をサボるとしつこく「どうしたん？体調わるいの？」と電話がかかってくる

サボりだ。と告げるとお腹空いたと五月蠅いためここ最近は学校をさぼれずにいる

筋肉からは

「はっはっはっ、最近偉いな獅子ヶ原」
などといわれる始末

一度「風邪引いた」などと嘘をついたらわざわざ家を調べてお見舞いにきやがった

家の場所を把握されちゃったわけだ

そこから毎朝迎えにくるようになりやがった

≡ § ≡ § ≡ § ≡ § ≡ §

「我が下僕よ、目覚めの時が来たぞ。我と一緒に古から存在する混沌に満ちた場所に参ろう」

めんどくさい言い回しだな。要約すると

「おはよう♪今日も一緒に学校いこうね♪」ってことらしいで俺は

「ハンカチ、ティッシュもったか」ととりあえず聞いておく

「……お母さん？」

「誰がオカンやねん!？」

とりあえず学校までは唯野が一方的に話かけてくる

「ねえ、守」

と今日は珍しく普通の口調で話かけてきた

「なんだ？」

少し間を開けてから

「……勉強教えて」

などと言ってきた

ちよつと身構えた俺がバカみたいだな

「お前の成績による」

「うう、前の学校じゃ200人中、11位だった」

自分の場所ほもごもこと小さく

「ちゃんといわねーと教えてやんないぞ」

「うう、守のバカ……。178位だったよ!!」

178／200か

「バカはそっちだろう」

「そんないう守の成績はどうなん!？」

「1位以外とったことないな。」

「!？」

目が真ん丸に開いて嘘と言わんばかりの顔で見してきた

「どうすんだ？テストは来週だぞ」

「うう、守の家は空いてる？」

「ああ、あいてるぞ」

「ならお泊まりでやるもん」

「いいぞ」

「!？」

自分で言っというてすごい驚いたようだ

許可されるとは思っていなかったのだろう

まあ、当たり前だな

「……親は？」

流石に邪気眼とはいっても年頃の女の子なのだろう

「俺は天涯孤独の身だ」

「!？」

俺が正直に言った所、唯野の顔が歪む

驚いているようだがその目には同情やあわれみではなく同類に向けるような目だ

「そっか、じゃあお泊まりするね」

「男女が二人でってのは流石に不味いだろう。俺はお前に発情することは何がおきてもないと思うが」

「発情」

その言葉を呟いて顔が真っ赤になっている

「でどうするんだ」

俺の言葉をきいてハッとしてから

「なら私の友達も連れていく！！守も誰か友達を連れてきてよ」

「しょうがないな。でも人形を友達にカウントするのはなしだぞ」

「わかってるもん。で何人までならいい？」

人数がいればそれだけ安心ってことだろう

「何人でもいいぞ」

さて、俺の方はどうするかな

ふと、ケータイを見してみる。

登録してある件数は三件

一人はこいつ唯野

二人目はちよつと特殊な知り合いだ

三人目は……

カツアゲを助けたり絡まれてた所を助けたり財布を落として困った所にしょうがなく金を渡してやったりあげくの果てに捨て猫の世話をしてた所を手伝ってやった所、兄弟よ、なんて呼び始めてきた奴だな

とりあえず三人目でいいよな

「じゃあ、友達を連れて明日からお泊まりで勉強会ね」
ウキウキとした感じで唯野は友達の所に走っていった
とすぐに戻ってきてから

「それと私の事はウサギと呼ぶがいい」
といって去ってった

なんなんだ一体？

第4羽（後書き）

作者の励みになるので、感想・評価など頂けたら、嬉しいです。

第5羽

「おお、兄弟よ。遊びのお誘いありがとうよ。」

翌日ただ……ウサギとの約束のため、俺は唯一の友(?)と呼べる奴を呼んでいた。

どうやらこいつが一番乗りらしい

「ああ、気にしないで上がってくれ」

「別にあがらせてもらいたくなんてないんだからねっ」

……

ボタン

「兄弟、悪かった、冗談だから上がらせてくれ」

閉めた扉の向こうからそんな事を懇願してきたのでしょうがなく俺は扉を再び開いてやった

「むう、兄弟は融通がきかな。こんなこともあろうかと融通がきくようになるラノベを持ってきてやったぞ。読んでくれ」

そういつて大量のライトノベルを俺に渡してきた

「……………これ、全部読めばいいのか？」

「ああ、兄弟なら気に入ると思うぜ」

キラーンと齒を光らせて俺に笑いかけてくる

と、そんなことをしている内に他のやつらも来たようだ

≡ § ≡ § ≡ § ≡ § ≡ §

私は友達5人をつれて守の家にお世話になることになった

「クックック、混沌はもう近い」

「ちょっと、行く先は獅子ヶ原くんの家なんだからホントに混沌ばかりで怖いじゃない。脅かすような事いわないでよ」

最近『ツンデレマニアック』の異名に変わってから前よりは怖がる人が少なくなったようだけど、やっぱり不良のイメージは根強いらしい

「もう、そんな顔しなくてもわかってるよウサピィ。」

「ウサギを毎日餌付けしてるような人がそこまで悪い人じゃないってことぐらいわかってるからさ」

ニヤニヤと皆がフォローしてくれる

「餌付けちゃうもん!!」

つと今私、そんな顔に出しちゃってたかな

「と着いたよ」

「わぁ」

「これは……………」

「ビックだね!!」

みんなは初めて見る守の家にビックリしているようだ。私も初めて来たときはすごいビックリしたもん。ベントが置いてあっても違和

感ないレベルの豪邸だもん。

「じゃ呼鈴ならそっか」

「あ、それは我に任せるがよい」

「ウサピーって子供っぽいね」

だってポチっと押す感覚がたまらないんだもん

「ポチっと」

ピンポンと心地よい音が鳴り響く

と友達のうち一人が鍵が閉まってないのをいいことに

「おっじゃましまーす！！」と入っていった

と同時に

「よく来たな」

守と守の友達と思われる人が出迎えてくれた

「「「おお」」」

女子一同から感嘆や賞賛ととれる声が上がった

なぜなら、迎えてくれた男子二人のルックスが異常によかったからだ
いつも不良として怖がられている守だがよく見るとホントに整った
顔立ちをしている。もし不良としてイメージがなければ学校1のイ
ケメンと騒がれてもおかしくないほどだ

服装は全体的に黒の服で左の腰にちよつと長めのチェーンがついて
いる

適当に選んだという感じだがそれがまたよく似合っている

もう一人の人は歳は私達よりも少し上の高校生といった所だろうか
中性的な顔立ちで守に負けず劣らずなイケメンである。服装は守と
は対照的に全体的に白の服で固められている。そして何より存在感
があるといえるのはその髪だろう。校則的にいいのかといえるキレ
いな金髪をそれこそ某上条さんみたいにツンツンにたててある
歩いているだけでジャニーズに間違われるだろう2人である

「どうした。冷たい飲み物を用意してあるからとりあえずあがって
くれ。自己紹介はそれからだ」

哑然としている私達に守は上がってくれといったってきた

「あ、はい」

「お邪魔しまーす」

「失礼します」

私達もとりあえず言われた通りにあがることにした
よく見ると顔が赤くなっている子もいる

「ウサピーもそんなに顔を赤らめてないではやくあがろうよ」
って赤くなってるのは私もか!?

「あ、うん。お邪魔しまーす」

第5羽（後書き）

作者の励みになるので、感想・評価など頂けたら、嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7134z/>

寂しいと兎は死ぬ

2011年12月27日01時54分発行